

刊行にあたって

わが国における内視鏡下手術は、1990年の腹腔鏡下胆嚢摘出術に始まり急速に発展し、現在では消化器外科領域においては年間約15万件に達し、消化器外科手術の中心となっており、消化器外科医にとって必須の技術となっています。さらに、周辺機器の発達に伴い手術手技も洗練化、高度化してきています。

そのような中で、外科医は常日頃、日進月歩の手術手技を理解、習得し、安心、安全な手術を遂行することが求められています。とくに経験の浅い若手の消化器外科医にとっては、わかりやすく解説された手術手技の入門書が必要であり、その目的でイラストと動画を掲載したシリーズ『ビジュアルサージカル 消化器外科手術』を2018年に刊行し、新しい手術書として高い評価を得てきました。

そこで、この発展目覚ましく充実してきた腹腔鏡下手術に焦点を当て、わかりやすく美しいイラストと豊富な動画を掲載した新たなシリーズ『ビジュアルサージカル 消化器腹腔鏡下手術』を刊行することにしました。前回とほぼ同様に分野で分け、①上部消化管、②下部消化管、③肝臓・胆道・膵臓・脾臓の3部構成となっています。とくに本シリーズでは、手術手技の解説のみならずその基本となる考え方についても簡潔に記述することに重点を置きました。また一部、ロボット支援手術についても掲載をいたしました。

本書が、若手の消化器外科医にとって手術手技が向上し、内視鏡下手術の技術認定取得のための参考となり、そして何よりも安心、安全な手術の遂行に少しでも資することができれば大変嬉しいことであり、またそうなることを確信しています。

最後に、本シリーズの企画・編集にご尽力いただいた編集委員の先生方と、大変多忙な診療の中、そしてコロナ禍の中、豊富な経験と手術手技をわかりやすく解説し、素晴らしい動画を提供いただいた先生方、そして順調な刊行までご苦勞をいただいた学研メディカル秀潤社の谷口陽一氏に、厚く御礼を申し上げます。

2022年盛夏

編集委員を代表して

上西紀夫

序文

書籍『ビジュアルサージカル 消化器外科手術』は、若手消化器外科医向けの手術書シリーズとして2018年に刊行されました。イラストと動画をふんだんに掲載し、手術の各場面でのポイントをきめ細やかに解説した、まったく新しいタイプの教科書として高い評価を得たものと思います。

今回、新たに腹腔鏡下手術に特化した教科書として、東京大学名誉教授 上西紀夫先生 総監修の下、大幅にリニューアルされることとなりました。その中で、上部消化管領域を担当させていただくこととなり、名誉であると同時に、その責任の重さを痛感しているところであります。

National Clinical Databaseによると、内視鏡（腹腔鏡）下手術は右肩上がりに増加しており、今や標準的手術になっていると思います。ちなみに、食道切除術では、2011年に31%であったものが、2019年には66.8%を占めるまでに倍増しています。胃癌手術でも、幽門側胃切除術が31.6%から51.9%に、胃全摘術が12.1%から27.5%になっており、現時点ではさらに増加しているものと推測されます。最近の研究結果によると、胃癌に対する腹腔鏡下手術の適応がさらに拡大すると思われ、ますます“普通”の手術になっていきます。一方、オープンの手術にはない道具、手技を会得する必要性があり、本書のようなイラストと動画による手術書の重要性がより一層高まることも間違いありません。

本書では、腹腔鏡下手術のための解剖認識から始まり、食道領域では、アカラシア、食道裂孔ヘルニアなどの良性疾患に対する手術を解説いただき、若手にもとつきやすい内容になっているものと思います。また、前版にはなかった、LECSや、D-LECS、スリーブ状胃切除術も取り上げていますので、ぜひご活用いただければと存じます。2018年には、ロボット支援手術が上部消化管癌にも保険適用となり、こちらも右肩上がりで増加しています。術者要件もかなり緩和され、若手外科医も取り組みやすくなっています。今回は、ロボット支援幽門側胃切除術を解説していただいています。セットアップ、ロールインから解説されており、こちらもご一読いただきたいと思います。もちろん、開腹手術がゼロになるわけではないと思いますし、その長所も捨てがたいところでもあります。開腹手術については、前版で詳細に解説されていますので、できれば本版だけではなく前版も手元に置いて参照していただければと存じます。

結びに、お忙しい中執筆していただいたすべての執筆者の先生方と、出版に尽力いただいた株式会社 Gakken の谷口陽一氏に心から感謝申し上げます。

2023年1月

東京大学大学院医学系研究科臓器病態外科学講座消化管外科学
教授 瀬戸泰之